



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<翻訳>メトディオスー代記 : 訳ならびに注
Author(s)	木村, 彰一; Kimura, Shoichi; 岩井, 憲幸 他
Citation	スラヴ研究, 33, 1-16
Issue Date	1986
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5154
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113256.pdf



メトディオス一代記

——訳ならびに注——

木村彰一・岩井憲幸

例言

1. 本稿は、われわれがさきにその翻訳を発表した“Vita Constantini”¹⁾といわば対をなす“Vita Methodii”の逐語訳である。この文献は、Methodiosの歿(885)後887年までの間にMoraviaで彼のスラヴ系の弟子たちの手によって²⁾、Vaillant, 43によれば³⁾“Vita Constantini”と同じくはじめギリシア語で書かれ、ついで古代教会スラヴ語に翻訳された。原本はともに伝わらず、12世紀から17世紀までの、いわゆるslavonによる写本が都合15点現存するのみである⁴⁾。

2. 本稿の目的、訳出の方針、校訂注の性格、使用した底本および参考文献(略称を含む)は、上記「コンスタンティノス一代記」のばあいとまったく同じである。読者は『スラヴ研究』No. 31, p. 1 f.の例言2-7を参照されたい。ただし参考文献のリストに次の2点を追加する:

Fontes=Fr. Grivec et Fr. Tomšič, *Constantinus et Methodius Thessalonicenses*. Fontes (Radovi Staroslavenskog Instituta, Knj. 4), Zagreb 1960.

Kliment 3=Климент Охридски, *Събрани съчинения*, т. 3. *Пространни жития на Кирил и Методий*, София 1973.

本文

4月6日に⁵⁾。

至福なるわれらの父にして師なる、モラヴィア大主教メトディオスの追想と一代記。

父よ、祝福を垂れ給え!⁶⁾

I.—慈悲深い全能の神は、見えるものをも見えざるものをも〔ふくめて〕、万物を、無

1) 「コンスタンティノス一代記」—訳ならびに注— (1) および (2), 『スラヴ研究』No. 31 (1984), pp. 1-17, No. 32 (1985), pp. 191-215.

2) 底本テキスト(例言2を見よ)にそえられたLehr-Splawińskiの解説(p. 21)による。

3) 文献の略称については、例言2を見よ。なおVaillantと違って“Vita Methodii”(ならびに“Vita Constantini”)がはじめから古代教会スラヴ語で書かれていたとする説もあり、それについては、たとえばS. B. Bernštejn, *Константин-филосов и Мефодий*, Москва, 1984, стр. 23を参照。

4) Kliment 3(例言2を見よ), c. 164-168による。

5) メトディオスの命日(c. XVIIを参照)。

6) 底本《Blagoslovi, otyčel!》。

から有へと創られ、あらゆる美で〔それらを〕飾られた。その美を多少とも熟慮する者は¹⁾、部分的に〔ではあっても〕理解し、〔そして〕このように驚くべきかつ多くの業をなされたおん者を認識することができる。〔――〕なぜなら、業の偉大さと美から、その創り主が熟慮によって推しはかれるからである²⁾。――そのおん者を天使たちは3倍聖なる声で歌い、また〔われら〕すべての正教徒たち³⁾は聖三位一体、すなわち父と子と聖霊とにおいて⁴⁾、すなわち3つのペルソナと呼ぶことはできるが、しかも唯一の神性であるところの3つの位格においてたたえるのである。なぜなら、すべての時と年に先立って⁵⁾、あらゆる知恵と非肉体的な知性によって⁶⁾、父ご自身が子をお生みになったからである。あたかも箴言〔の書〕が「〔神は〕すべての丘に先立ってわたしを生む。」⁷⁾と言ったごとくである。また福音書の中では、神のみことば自身が、最後の時に⁸⁾われらの救いのために受肉してのち、そのいとも清き口をとおして〔こう〕語られた。「わたしが父におり、父がわたしにおられる。」⁹⁾その同じ父から聖霊もまた出るのである。〔それは〕あたかも子ご自身が神の声で、「父から出る真理の霊」¹⁰⁾と言ったごとくである。〔――〕¹¹⁾この神〔こそ〕が、ダビデが〔次のように〕言うように、あらゆる被造物を完成させたのである。「〔もろもろの〕天は、主のみことばによって確固たるものとなり、天の万軍は、主の口の息吹きによって〔造られた〕¹²⁾。主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、できあがった。¹³⁾」〔この神が〕¹⁴⁾すべて〔の存在〕に先立って人間を造られた。〔神は〕大地からちりを取り、みずから命の息で息を吹きこみ、〔人間が〕楽園へはいるよう¹⁵⁾、ことばによる思考力と自由意志をも〔吹きこまれた〕。〔そして神は〕それを守れば不死の者として生きながらえ、またもしも〔それを〕破れば、神の命令によらずみずからの意志により、死によって死すべく¹⁶⁾、彼（人間）に試練の掟を課された。

さて悪魔は、人間がこのように尊重され、おのれがみずからの傲りゆえにそこから落ちたその場所へ〔のぼるべく〕励まされているのを見ると、〔彼が〕掟を破るように仕向けた。すると神は¹⁷⁾、人間を死すべきものと宣告し、彼を楽園から放逐した。そのとき以来、悪魔は多くの策略を用いて人の種族をそそのかし、まどわしはじめた。だが神は、大

1) 底本 《кѣто размышлјаје по малу》。

2) 知恵の書, xiii, 5.

3) 底本 《провонѣрьнии》を《правонѣрьнии》と改める。

4) 底本 《въ отъци и сыну свѣтѣjemь душѣ》。《synu》のあとに《i》を補う。

5) 底本 《прѣжде бо въсјакогo часа i лѣта》。

6) 底本 《въсјаčемь [sic!] умомь i съмысломь перлѣтъскомь》。

7) 箴言, viii, 25.

8) ペテロ I, i, 20.

9) ヨハネ, xiv, 11.

10) ヨハネ, xv, 26.

11) 底本 《ischoditъ съ bogъ》を《ischoditъ, съ bogъ》と改める。

12) 詩篇, xxxiii, 6.

13) 詩篇, xxxiii, 9.

14) 底本 《създаše се прѣжде》を《създаše се. прѣжде》に改める。

15) 底本 《da въnidetъ》。

16) 創世, ii, 17.

17) 底本 《i bogъ》。

いなる慈悲と愛とをもって最後まで人間を見捨て給わず、万人が〔その者たちに〕な
らって善きことに励むよう、いかなる年にもいかなる時にもある者たちを選ばれ、人びとに彼
らの業と戦いとを啓示されたのである。

エノク¹⁾はそのよう〔な者のひとり〕であった。彼は希望をもって神のみ名を呼んだ最
初の人である²⁾。エノクは、その後神のみ心にかない、〔天へと〕移された³⁾。ノアはその
世代の人びとの中で義（ただ）しき者と見なされ⁴⁾、箱舟にのって大洪水をまぬがれた。
ふたたび大地が神の被造物によって充たされ、飾られるためである。アブラハムは、諸民
族の離散ののち⁵⁾、すべての人びとが迷いにおちいつていたとき、神を知り、神の友と呼
ばれ⁶⁾、〔次のような〕約束をえた。「なべての民は、あなたの子孫において祝福されるで
あろう。」⁷⁾イサクはキリストに似せて、山上でいけにえとしてささげられた⁸⁾。ヤコブは妻
の父の偶像を破壊した⁹⁾。すると、彼は地から天に達するひとつの階段を見、神の使いた
ちがそれを昇り降りしているのを〔見た〕¹⁰⁾。そしておのれの子孫に対する祝福のことばの
中で、〔彼は〕キリストについて預言した¹¹⁾。ヨセフはエジプトで人びとに食物を与え、神
に属する〔者である〕ことを示した¹²⁾。アウスティス (Austis) のヨブを、聖書はただし
い、正直な、全き〔者〕¹³⁾と言っている。〔彼は〕試練をうけて〔これに〕耐え、神に祝福
された。

モーセは、アロンとともに神の祭司の中で¹⁴⁾、ファラオの神と呼ばれ¹⁵⁾、エジプトを苦
しめた¹⁶⁾。〔彼は〕神の人びとを〔エジプトから〕連れ出し、昼は輝く雲により、夜は火
の柱によって¹⁷⁾〔彼らを導き〕、そして海を〔ふたつに〕割った。そこで〔人びとは〕か
わいた場所を通り抜けたが、〔彼は〕エジプト人たちを〔海に〕溺れさせた¹⁸⁾。水のない荒
野の中でも、〔彼は〕人びとにじゅうぶん水を飲ませ、天使のパン¹⁹⁾と鳥²⁰⁾をあきるほど
食べさせた。そして、まるで人が神と話すことができるかのように、顔と顔とを合わせ
て²¹⁾神と話したのち、人びとに神の指で書かれた掟²²⁾を与えた。ナウエ (Nauē) の〔子〕ヨ

- 1) 底本《Enochъ》。
- 2) 創世, iv, 26.
- 3) 創世, v, 24; ヘブル, xi, 5.
- 4) 創世, vi, 9; 集会の書, xlii, 17.
- 5) 底本《…języкъ》を《…językъ》に改める。
- 6) Vita Const., c. X (『スラヴ研究』No. 32, p. 192, 注6) を参照。
- 7) 創世, xxii, 18; xxvi, 4.
- 8) 創世, xxii, 2; ヘブル, xi, 17.
- 9) 創世, xxxv, 4.
- 10) 創世, xxviii, 12.
- 11) 創世, xlix, 10.
- 12) 創世, xli, 38.
- 13) ヨブ, i, 1.
- 14) 詩篇, xcvi, 6.
- 15) 出エジプト, vii, 1.
- 16) 出エジプト, ix, 10; xii, 30.
- 17) 出エジプト, xiii, 21.
- 18) 出エジプト, xiii—xiv.
- 19) 詩篇, lxxviii, 25; 出エジプト, xv, 27; xvi, 4, 13; xvii, 6.
- 20) 出エジプト, xvi, 6.
- 21) 出エジプト, xxxiii, 11.
- 22) 出エジプト, xxxi, 18.

シュア¹⁾は、敵と戦ったのち、神の人びとに土地を分け与えた²⁾。士師たちもまた多くの勝利をえた。神の恩寵をうけたサムエルは、王に油をそそぎ、主のみことばによって〔彼を〕即位させた³⁾。ダビデは柔和をもって人びとを牧し⁴⁾、神の歌を〔彼らに〕教えた。神からいかなる人よりも多くの知恵を授けられたソロモンは、彼自身完璧に実行しなかったとはいえ、箴言の書とともに多くの良き教えを垂れた。人びとの悪心を飢饉によってあばいた⁵⁾エリヤは、死んだ子どもを生き返らせ⁶⁾、天からことばによって火を運びおろし⁷⁾、多くのいけにえを焼き払い、〔それらを〕ふしぎな火によって焼きつくした⁸⁾。〔彼は〕忌まわしい預言者たちをみな殺しにし⁹⁾、弟子に2倍の霊を与えたのち¹⁰⁾、火の車と〔火の〕馬に乗って天に昇った¹¹⁾。エリシャは恩寵をうけて¹²⁾2倍の奇蹟をおこなった¹³⁾。

他の預言者たちは、それぞれおのれの時代において、〔やがて〕起きるはずの驚くべきことがらについて預言した。その人びとののち、旧約と新約の間の仲介者たる偉大なヨハネは、キリストの洗礼者であり、生ける人びとと死せる人びと〔双方の〕証人であり告知者であった¹⁴⁾。聖使徒ペテロとパウロは、キリストのほかの弟子たちとともに、稲妻のように全世界を通り抜け、全地を照らした。彼らののち、殉教者たちは〔その〕血でけがれを洗い落とし、一方聖使徒の後継者たちは、皇帝に洗礼を施し、いくたの戦いと労苦とによって異教を絶滅した。

尊者シルヴェステル (Silvester) は、318人の教父とともに、コンスタンティヌス大帝の援助をうけて、ニカイアで第1回公会議を開き¹⁵⁾、アリウスに打ち勝ち、彼と〔彼が〕聖三位にさからって唱えた彼の異端とを呪逐した¹⁶⁾。〔それは〕あたかも、かつてアブラハムが318人の家の子とともに王を殺し¹⁷⁾、サレムの王メルキセデクから祝福を受け、パンをもぶどう酒をも受けた〔――〕なぜなら彼(メルキセデク)はいと高き神の祭司であったから¹⁸⁾〔――〕のに似ていた。

またダマスス (Damasus)¹⁹⁾と神学者〔ナズィアンゾスの〕グレゴリオス²⁰⁾は、150人の

- 1) ヨシュア, i, 1.
- 2) ヨシュア, xiv, 1.
- 3) サムエル I, x, 1.
- 4) 詩篇, cxxxii, 1; lxxviii, 70-71.
- 5) 列王 I, xvii, 1.
- 6) 列王 I, xvii, 21-22.
- 7) 底本 《sъ nebesъ sъnesъ》. Lavrov のテキストによって 《sъnesъ》 のあとに 《slovomъ》 を補う。
- 8) 底本 《ropali mъnogy žrtvy sъžъže divъnomъ [sic!] ognjemъ》. 《žrtvy》 のあとに 《,》 を補って読む。列王 I, xviii, 38.
- 9) 列王 I, xviii, 40.
- 10) 列王 II, ii, 9.
- 11) 列王 II, ii, 11.
- 12) 底本 《milostъ priimъ》.
- 13) 列王 II, ii, 13-24.
- 14) マタイ, iii; マルコ, i, 1-9; ルカ, iii, 1-22; ヨハネ, i, 19-34.
- 15) 325年。
- 16) 底本 《prokletъ i jeresъ jeho》. Lavrov のテキストに従って 《prokletъ》 と 《i》 の間に 《i》 を補う。
- 17) 創世, xiv, 14.
- 18) 創世, xiv, 18.
- 19) 教皇ダマスス1世 (366-384)。
- 20) Vita Const., c. III (『スラヴ研究』No. 31, p. 4, 注12) 参照。

教父とともに、またテオドシウス大帝とともに、コンスタンティヌポリスにおいて、聖なる信条、すなわち「われは唯一の神を信ず」を確立した。また一方〔彼らは〕マケドニオス (Makedonios)¹⁾を破門し、〔マケドニオスが〕聖霊にさからって語った彼の瀆神〔のことば〕をも呪逐した²⁾。カエレスティヌス (Caelestinus) とキュリロス (Kurillos) は、200人の教父および別の〔テオドシウス〕皇帝とともに、エペソスで、ネストリオスを、〔彼が〕キリストにさからって語ったあらゆるたわごととともに打ち砕いた³⁾。レオン (Leōn) とアナトリオス (Anatolios)⁴⁾は、正教徒たる皇帝マルキアノス (Markianos) とともに、また630人の教父とともに、カルケドンでエウテュケス (Eutukhēs)⁵⁾の狂気の沙汰とたわごとを呪逐した⁶⁾。ウィギリウス (Vigilius)⁷⁾は、神の意にかなったユスティニアヌス⁸⁾とともに、また165人の教父とともに、第5回公会議を召集し⁹⁾、審問し、呪逐した¹⁰⁾。

ローマ教皇アガトン (Agathōn) は、270人の教父と叡聖なる皇帝コンスタンティヌス¹¹⁾とともに、第6回公会議において¹²⁾、多くの騒擾を鎮圧した。そして〔彼らは〕その公会議の参加者全員とともに〔全員一致で〕、〔異端者たち、〕すなわち、パラニケ (Pharanikē) のテオドロス (Theodōros)¹³⁾、セルギオス (Sergios)¹⁴⁾とピュッロス (Purrhos)¹⁵⁾、アレクサンドレイアのキュロス (Kuros)¹⁶⁾、ローマのホノリウス (Honorius)¹⁷⁾、アンティオケイアのマカリオス (Makarinos)¹⁸⁾、およびその他の彼らの同調者たちを破門し、呪逐し、また〔一方〕キリスト教の信仰を真理の上に据え、〔これを〕確固たるものとしたのである。

II.—さて、これらすべての者たちののち、万人が救われて真理を悟るに至るよう望んでおられる慈愛に富まれる神¹⁹⁾は、われらの時代において、かつて誰ひとりたえて気づかうことのなかったわが民のために、われらの師、至福なるメトディオスをよき事業のために起用された。われらは、彼の善き行ないと戦いのすべてを、はばかり所なくこれら〔神

1) コンスタンティヌポリスの主教 (364年歿)。

2) 381年。

3) 431年。

4) カルケドン公会議当時のコンスタンティヌポリスの総主教。

5) カルケドン公会議当時のコンスタンティヌポリスの修道院長。

6) 451年。

7) ローマ教皇 (537-555)。

8) 底本, Lavrov とともに《IJustinomъ》とするが、筆者はあきらかに皇帝 Justinianus を Justinus と誤っている。

9) 553年。

10) 底本 《сѣставлѣше…izikavъше [sic!] prokleše》. 《…》を除き、《izikavъше》を《iziskavъше》に改める。

11) 皇帝 Kōnstantinos IV (668-685)。

12) 680/681年。

13) 次に出る Sergios の同調者。

14) 底本 《Sergъja》. Sergios はコンスタンティヌポリス総主教 (610-638)。

15) Sergios の後を継いだコンスタンティヌポリスの総主教 (655年歿)。

16) アレクサンドレイアの人。Sergios の同時代人。

17) ローマ教皇 (625-638)。

18) アンティオケイアの総主教。

19) テモテ I, ii, 4.

の心に] かなった人びとひとりひとり [のそれ] とくらべる [ことができる]。なぜなら、彼は行動によって雄弁家をしのぎ、ことばによって行動家をしのいで、ある人びとにはひとしく、またある人びとにはさほど劣ることなく、さらにまたある人びとよりは偉大だったからである。けだし彼は [これら] すべての人びとに似た者となり、 [その] すべての人びとの似すがたをおのれの上に現わしたのである。 [すなわち] 神 [へ] の畏敬を、肉体の純潔による律法の遵守を¹⁾、熱心な祈りと聖性を、厳しくまた心地よいことばを、 [—] 敵に対しては厳しい [ことば] を、さとしを受け入れる人びとに対しては心地よい [ことば] を [—]、激しさを、静けさを、慈悲を、愛を、苦悩を、そして忍耐を [おのれの上に現わしたのである]。すべての人を得るために、すべての人に対して [これら] すべてとなったのである²⁾。

さて、彼は双方 [の親] とも卑しからぬ、むしろすこぶるりっぱな、かつ名誉ある家柄 [—] 彼の外面的風貌がそうであったように [—]、なによりもまず神に、さらには皇帝に、さらにはまたテッサロニケの地全体によく知られた [家柄の] 出であった。それゆえ、律法学者たちも [彼が] 子供のころから彼をいつくしみ、尊敬の念をもって [彼の] ことを] 話していた。やがて皇帝が彼の慧敏を知り、彼にスラヴ人のある州³⁾ の統治をゆだねた。それは彼 (メトディオス) がスラヴ人のあらゆる習俗を学びとり、しだいにそれらに慣れしむるためであって、わたしに言わせれば⁴⁾、あたかも彼 (皇帝) は彼を [のちに] 教師、かつ最初の大主教として、スラヴ人のもとへ派遣するであろうことを予見したかのごとくであった。

III.—さて、その州にあって多くの年月を過ごしたのち、彼はこの世に常軌を逸した多くの混乱のあることを知り、地上の暗闇への意欲を天上的思索におきかえた。なぜなら、彼は永續することのない事柄によって [おのれの] 高貴な魂を悩ましたくなかったからである。そして時機をえて、州 [知事の職] を放棄し、聖なる師父たちの住むオリュンポス [山]⁵⁾ へと赴いた。彼は剃髪し、黒衣をまとった。そして服従に身をまかせ、修道士のあらゆる戒律を完全に守り、聖典 [を読むこと] に専心したのであった。

IV.—さて、時が至り、皇帝は彼のきょうだい、 [すなわちかの] 哲人 [コンスタンティノス] を呼び寄せ、助け [手] として彼 (メトディオス) を伴ってハザール人 [の地] に [赴くことを命じた]。なぜなら、かの地ではユダヤ人たちがキリスト教の信仰を大いに冒瀆していたからである。すると彼 (メトディオス) は、「わたしはキリスト教の信仰のために死ぬ用意がある」と言って、 [皇帝の意に] 背かず、行ってしもべのように弟に

1) 底本 《zapovědnaja [sic] chranjenbja, pl'vtskoja čistotoja》. Vaillant, 44 の云うごとく 《pl'vtskoja čistotoja》を単数対格の誤りとみて、《律法の遵守を、肉体的純潔を》と訳すべきであろうが、いまはしばらく底本に従う。

2) コリント I, ix, 22; ix, 19.

3) 底本 《k'neženbje [...] Slovenbko》. 《k'neženbje》をギリシア語 arkhontia の訳と見て、かりに《州》と訳す。くわしくは Dvornik, 15 ff. を参照。

4) 底本 《reka, že azъ》. 《, 》を除く。

5) Vita Const., c. VII (『スラヴ研究』No. 31, p. 12, 注7) 参照。

つかえ、彼に服従した。彼らふたりは〔——〕彼（メトディオス）は祈りにより、哲人はことばによって〔——〕彼ら（ユダヤ人）を打ち負かし、〔彼らを〕恥じ入らせた。

さて、皇帝と総主教は、彼の神の道における¹⁾〔この〕りっぱな戦い²⁾を見た。〔そこで彼らは〕彼に強いて、このような人物を必要とする由緒ある土地に、彼を大主教として叙階しようとした。彼は辞退したが、彼らは彼の意に反して、彼をポリュクロン (Polukhrōn) と呼ばれる、修道院³⁾の院長に任じた。その〔修道院〕には大柁 24 杯の黄金の収入があり、70 人以上の神父が住んでいた。

V.——さて、その頃〔次のようなことが〕起こった。〔すなわち〕スラヴの侯ロスティスラフは、スヴァトプルク (Svatopluk)⁴⁾とともに、モラヴィア〔人の地〕から皇帝ミカエルのもとに〔使者を〕おくり⁵⁾、こう言わせたのである。「神の慈愛により、われらはつつがない⁶⁾。〔かつて〕わが〔地〕にはイタリア人〔の地〕からもギリシア人〔の地〕からもドイツ人〔の地〕からも、多数のキリスト教の教師がはいり込み、さまざまな仕方であれらを教えた。だが、われらスラヴ人は素朴な民であり、〔その〕われらを真理へと導き⁷⁾、〔聖典の〕意味を教えてくれる人物をわれらはもたない。よって、いとも畏き陛下よ⁸⁾、われらのためにすべての真理を説き明かしてくれる⁹⁾、そのような人物を派遣して頂きたい。」

そのとき、皇帝ミカエルは哲人コンスタンティノスに向かって、〔こう〕言った。「哲人よ、おまえはこの話を聞いているか。おまえをおいて、他にこれをなしとげることのできる者はいない。さあ、ここにおまえのために多くの贈り物が〔ある〕。そしておのれのきょうだい、修道院長メトディオスを伴って、〔かの地へ〕行くがよい。なぜなら、おまえたちふたりはテッサロニケ人であり、テッサロニケ人はみなスラヴ人のことばをなまりなく話すからである。」

そのとき、彼らふたりは、「神を畏れ、王を尊べ」¹⁰⁾と言った聖使徒ペテロのことばに従い、あえて神に対しても皇帝に対しても拒否しなかった。だが、事の重大さを聞き知ると、彼らふたりは彼らと志を同じくする他の人びととともに、一心に祈りを捧げた。するとそのとき、神は哲人にスラヴ語〔訳〕聖典〔についての考え〕を啓示された。すると彼はたちまち文字を制定し、〔福音書の翻訳〕テキストを作り上げ、メトディオスを伴って、モ

1) マタイ, xxii, 16 他。

2) テモテ II, iv, 7.

3) オリュンポス山 (p. 66, 注 5 参照) にある。

4) ロスティスラフの甥。870 年ロスティスラフ失脚後、大モラヴィア侯国の侯となる。当時はスロヴァキアの Nitra 地方の領主であった。

5) Vita Const., c. XIV (『スラヴ研究』No. 32, p. 203 以下) 参照。

6) エペソ, ii, 5.

7) ヨハネ, xvi, 13.

8) 底本《dobře, vladyko》を《dobre vladyko》に改める。なお Vaillant, 44 によれば《dobre vladyko》は XI 世紀まで皇帝に関してのみ用いられたギリシア語の呼びかけ《ariste (または kalliste) despota》の訳であるという。

9) マタイ, iii, 15.

10) ペテロ I, ii, 17.

ラヴィア人〔の地〕へと旅に出た。彼（メトディオス）はふたたび従順をもって服しながら、哲人に仕えはじめ、そして彼とともに教え〔はじめた〕。そして3年が過ぎると、彼らふたりは弟子たちを教えおわり、モラヴィア人〔の地〕から帰途についた¹⁾。

VI.—さて、教皇ニコラウス (Nicolaus) はこのようなふたりの人物〔のこと〕を聞き知ると、あたかも神のみ使いのごときふたりに会いたいと望み、彼らのもとに〔人を〕つかわし〔てよびよせ〕た。彼（教皇）はスラヴ語〔訳〕福音書を聖使徒ペテロの祭壇に捧げて、彼らふたりの〔宣〕教を祝福し、また至福なるメトディオスを司祭職に叙階した。だが〔一方〕、スラヴ語〔訳〕聖典を誹謗する多くの人びとがおり、〔彼らはこう〕言った。「〔ピラトが〕主の十字架にしろした²⁾〔その〕ピラトの罪状札により、ヘブライ人および³⁾ギリシア人およびラテン人をのぞけば、自分たちの文字をもつにあたいする民族は、ほかに存在しない。」〔すると〕教皇は、彼らをピラト主義者たちかつ3言語主義者たちと名づけ、はげしく非難した。そして彼は、〔この〕同じ病いにかかっていたひとりの司教に命を下した。すると彼はスラヴ人の弟子たちのなかから、3人を司祭に、ふたりを読誦師 (anagnōstēs) に叙階したのであった。

VII.—さて、多くの日々のおち、〔神の〕審判に赴くことになった哲人は、おのれのきょうだい、メトディオスに向かって〔こう〕言った。「見よ、きょうだいよ。わたしたちふたりは〔同じ〕ひとつの敵をたがやす〔並んでつながれた〕2頭の役畜であった。そしてわたしは、おのれの日を終えて、畑の上で倒れようとしている。一方、あなたは山を⁴⁾こよなく愛している。しかし、だからといって、その山のためにおのれの〔宣〕教〔のつとめ〕を放棄してはならない。なぜなら、いかなることによって、あなたはそれ以上に救われることができるというのか。」

VIII.—さて、コツェル (Kocel)⁵⁾は、教皇のもとに〔使者を〕派遣して、われらの至福なる師、メトディオスを彼〔のもと〕につかわすよう求めた。すると教皇は〔こう〕言った。「あなたひとりにだけではなく、このスラヴの国々にのすべてに、神から、および〔主の〕最初の後継者であり天の王国の鍵の保管者である聖ペテロからつかわされた教師と

1) 底本 《vřzvratiste se iz Moravy》. この1句は、Vita Const., c. XV の最後のパラグラフ (『スラヴ研究』, No. 32, p. 207 参照) にある、ロスティスラフがキュリロスに金、銀、その他の贈りものを与えようとした、という趣旨の記事とあいまって、両兄弟が少なくともこの時点においてはモラヴィア伝道の目的を果たしたとして、究極的にはビュザンティウムへ帰る意図があったことを物語るものの如くである。他方、Vita Const., c. XV の上に引いた箇所には、《〔哲人は〕…自分の弟子たちを叙階してもらうために〔旅に〕出た》とあるが、その《叙階》をどこで実現させるつもりであったかは語られておらず、この難問題をめぐって古来学者の間で議論がたたかわされてきたことは周知のとおりである。Fr. Dvornik, *Byzantine Missions among the Slavs*, New Brunswick, 1970, p. 132 ff., Skazanija, 132 f. を参照。

2) ルカ, xxiii, 38; ヨハネ, xix, 19-20.

3) 底本 《Evreii》を《Evrei i》に改める。

4) オリュンボス山 (p. 66, 注5 参照) を指す。

5) Vita Const., c. XV の最後のパラグラフ (『スラヴ研究』 No. 32, p. 207) 参照。

して、わたしは彼を派遣しよう。」そして書簡をしたためて、彼は彼（メトディオス）を派遣した。「司教にして神のしもべ、ハドリアヌス (Hadrianus) より、ロスティスラフおよびスヴェトブルクおよびコツェルへ。いと高きところでは、神には栄光、地には平和、人びとには〔神の〕好意〔あれ〕¹⁾。われらは〔これまでに〕あなたがたの霊的熱意について聞くところがあり、今はまたあなたがたの救いのために、望みと祈りをもって期待したがゆえに、〔われらは次のことを知っている。〕²⁾主はあなたがたの心を、彼（主）をさがし求めるためにふるい立たせ、信仰のみならず善き行ないによっても、神に仕えねばならぬことをあなたがたに示し給うたのだ。けだし行ないのない信仰は死んだものであり³⁾、また神を知っていると思いながら、行ないによって彼にそむく者は、失格者だからである⁴⁾。

「あなたがたは、この聖座ばかりではなく、敬虔なる皇帝ミカエルのもとにも教師を求めた。そこで彼（ミカエル）は、われらが〔あなたがたの地に〕行きつかぬうちに、至福なる哲人コンスタンティノスをきょうだいとともにあなたがた〔のもと〕に派遣した。そこでこのふたりの者は、あなたがたの国ぐにが使徒の座に属すべきものと知り、教会法〔の規定に定められたこと〕以外はなにひとつ行なわなかった〔ばかりか〕、聖クレメンスの聖遺骸を運びつつ⁵⁾、われらのもとへ来た。そこでわれらは三重のよろこびを感じ、熟考したうえ、彼（メトディオス）を弟子たちとともに叙階し、われらの息子であり申し分のない知恵と正しい信仰の持ち主であるメトディオスをあなたがたの国ぐにへ派遣することに決定した。これはあなたがたの求めに応じて、彼が、〔——〕哲人コンスタンティノスが、神の恩寵により、かつはまた聖クレメンスの取りなしによって〔これを〕始めたように〔——〕教会のあらゆる制度に完全にのっとり、あなたがたのことばで聖書を説いて、聖なるミサすなわち典礼をも、洗礼〔式〕をもとり行ないつつ、あなたがたに教えるためである。

「同様に、だれか他の者がしかるべくかつ正しい信仰にそって説くことができるのであれば、〔その者の事業は〕神によっても、われらによっても、カトリックおよび聖使徒の全教会によっても聖とされ、かつ祝福されるであろう。〔これは〕あなたがたが神の律法をたやすく学ぶように〔するためである〕。だが、あなたがたは、ミサにおいてはまずはじめに使徒書簡と福音書とをラテン語で読み、つぎにスラヴ語で読むという、この慣習だけは守るがよい。〔それは〕『もろもろの民が主をほめたたえる』⁶⁾、また別の箇所〔にある〕『一同は、聖霊が彼らに答えさせるままに、神の偉大さをいろいろのことばで語りだす』⁷⁾という聖書のことばが成就するためである。

「だがもしも、あなたがた〔のもと〕に集まった教師たち、また聞く耳をくすぐり、真

1) 底本 《slava vъ vyšňiich [sic] bogu i na zemli mirъ, vъ člověčechъ blagovoljenje[.]》。なおルカ、ii, 14 参照。

2) この挿入は Lehr-Spławiński の底本訳 (p. 239)、および Kliment 3, p. 199 所収のブルガリア語訳に従った。

3) ヤコブ、ii, 26。

4) テトス、i, 16; ヤコブ、ii, 26。

5) Vita Const., c. VIII (『スラヴ研究』No. 31, p. 14) 参照。

6) 詩篇、cxvii, 1。

7) 行伝、ii, 4; ii, 11。

理から作り話へとそらす¹⁾者たちのうち、だれかが不遜にも別の方法を取り、あなたがたのことばの聖典を非難することによって、あなたがたを墮落させることを始めたならば、〔その者は〕おのれ〔の誤り〕を正すまで、聖餐式のみならず教会からも除名されるであろう²⁾。なぜなら、その者たちは狼であって、羊ではない³⁾からである。〔よろしく〕彼らを彼らの実(み)から知り⁴⁾、彼らを警戒すべきである。しかしながら、あなたがた最愛の子どもたちよ、神の教えに耳をかたむけよ。そして教会のさとしをこぼんではならない。〔これは〕あなたがたが、すべての聖なる者たちとともに、天にましますわれらの父なる神の、まことの礼拝者⁵⁾とならんがためである。アーメン。〕

さて、コツェルはおおいなる尊敬とともに彼(メトディオス)を迎え入れると、ふたたび彼と20人の高貴な身分の人びとを、教皇のもとへ派遣した。〔これは教皇が、〕70使徒⁶⁾のひとり、聖アンドロニコス(Andronikos)の主教座であったパンノニア(Pannonia)の大司教職に、彼を叙階するためであった。そしてそのようになった。

IX. — さてこののち、良きことを妬む者であり真理の敵対者である〔かの〕宿敵⁷⁾は、「おまえはわれわれの教区で教えている」と〔言って〕、彼(メトディオス)に対抗してすべての司教とともに、モラヴィア人の敵、〔すなわちドイツ〕王⁸⁾の心をたかぶらせた。だが彼(メトディオス)は〔こう〕答えた。「もしもわたしが、〔ここが〕あなたがたの〔教区〕であると知っていたならば、わたしは立ち退いていただろう。しかし、〔ここは〕聖ペテロの〔教区〕なのだ。まことに、もしもあなたがたが嫉妬と貪慾のゆえに、教会法〔の規定〕に反して古くからの境界をふみ越え、神の教え〔の弘布〕を妨げるのであれば、あなたがたは頭蓋骨で鉄の山に穴をうがとうとして、あなたがたの脳髓を飛び散らせないように用心するがよい。」彼らは怒り狂って彼に向かって〔こう〕言った。「おまえ〔こそ〕おぞましいめにあらうだろう。」彼は答えた。「わたしは王たちの前に真実を語って恥じることがない⁹⁾。だが、あなたがたはわたしの上に、あなたがたの意志を働かせるがよい。なぜならわたしは、〔かつて〕苦しみをもって¹⁰⁾真実を語りつつ、この〔地上の〕生命をも失った人びとよりもまさってはいないのだから。」

さて、多くの議論がたたかわされたにもかかわらず、彼らが彼に対抗して答えることが

1) テモテ II, iv, 3-4.

2) 底本《da badeť otъlāčepъ nъ tьkъmo vъ sādъ danъ sьrkъve.》. A. A. Šaxmatov に従って《nъ tьkъmo》以下を《ne tьkъmo vъsāda, nъ i sьrkъve.》に改める(なお Skazanija, 154 参照)。

3) マタイ, vii, 15.

4) マタイ, vii, 16.

5) ヨハネ, iv, 23.

6) ルカ, x, 1; ロマ, xvi, 7.

7) 悪魔を指す。

8) 底本《srъdъce vragu Moravъskajego kralja》.《Moravъskajego》のあとに《,》を補って読む。大モラヴィア侯国の主権者は云うまでもなく《侯》(kъnędzъ)であって、《王》(kraljъ)とは呼ばれないからである。Skazanija, 156 の挙げる A. Belovskij の読み方も同じ。なおこの《kraljъ》は Ludwig der Deutsche を指すものであろう。

9) 詩篇, cxix, 46.

10) 底本《mъkami》。

できなくなったとき、〔ドイツ〕王がうつむいたまま¹⁾〔彼らにこう〕言った。「わがメトディオスを疲れさせるな。なぜなら、彼はもう、まるで炉の近くに〔いる〕ように、汗をかいているのだから。」〔すると〕彼（メトディオス）は言った。「しかり、陛下よ。あるとき、汗をかいた哲人に出会った人びとが、『なぜあなたは汗をかいているのか』と彼に言うと、彼は〔こう〕言った。『無学のやからと議論した〔から〕。』」このことばについて言い争ったのち、彼らは散会した。だが、彼らは彼をシュヴァーベン（Schwaben）に追放し、〔そこで〕2年半〔彼を〕幽閉した。

X.——〔この知らせが〕教皇のもとにとどいた。そして〔これを〕知ると、彼は彼らに対し破門〔状〕を送った。彼らが彼（メトディオス）を幽閉しているかぎり、〔ドイツ〕王の司教全部がミサすなわち典礼〔の祈禱文〕を唱えない〔ようにする〕ためである。そこで彼らは彼を釈放し、コツェルに〔こう〕言った。「もしおまえがこの者を自分の手許にとどめておくならば、おまえはわれわれ〔の追求〕を無事にまぬかれ〔ることができ〕ないであろう。」しかし、彼らは聖ペテロの裁きをまぬかれなかった。なぜなら、彼らのうち4人の司教が死んだからである。

さてそのとき、〔次のような事件が〕起こった。〔すなわち〕モラヴィア人たちは、ドイツ人の司祭たちが彼らのなかに住みながら、自分たちに好意を持たず、かえって自分たちに対して奸計をめぐらしていたことに気づき、〔彼ら〕全員を追放してしまったのである。そして彼ら（モラヴィア人たちは）教皇のもとに〔使者を〕派遣して〔こう言わせた〕。「はじめわれらの父祖が聖ペテロによって洗礼をさづけられたように、われらにメトディオスを、大司教かつ教師として与えよ。」教皇はただちに彼（メトディオス）を派遣した。するとスヴァトブルク侯は、全モラヴィア人とともに彼を迎え入れ、教会全部とすべての都市の聖職者とを彼〔の手〕にゆだねた。

さて、その日以来、神の〔宣〕教は大きく成長しはじめ、すべての都市で聖職者がふえ〔はじめ〕、異教徒はおのれの迷いをすててまことの神を信仰し〔はじめた〕。それにつれて、彼ら（モラヴィア人たちは）自身がたえず語っているように、モラヴィア人の領土も四方〔の境界〕をよりいっそう広げはじめ、おのれの敵たちを首尾よく打ち負かし〔はじめた〕のである。

XI.——さて、彼には預言の才能もあった。彼の預言²⁾の多くが現実となったからである。そのうちの一二を、われわれは〔ここに〕物語ろう。きわめて強大な³⁾ひとりの異教の侯が、ヴィスワ（Wysła）〔川沿岸地方〕に君臨していた。〔彼は〕キリスト教徒たちをあざわらい、かつ虐待していた。さて、彼（メトディオス）は彼のもとに使いをおくり、〔こう〕言わせた。「息子よ、おのれの〔領〕地において、おのれの意志により洗礼を受けることはあなたにとってよいことだ。〔それは〕あなたが捕えられたとき、異国でむりに

1) 底本《iz nica》。訳は Vaillant, 45 の解釈による。

2) 底本《procicanbja》を《proricanbja》に改める。

3) 底本《silnbzъ》を、《silbnъ》に改める。

洗礼を受けさせられてわたし〔の言ったこと〕を思い出すことがないようにするためである。〕〔果して〕そのようになった。

またあるとき、スヴァトプルクが異教徒たちと戦い、なにひとつ戦果をおさめず、かえって手間どっているうちに、聖ペテロのミサすなわち典礼が近づいたので、彼（メトディオス）は彼のもとに使者をおくり、〔こう〕言わせた。「もしあなたが、おのれの兵士たちとともに聖ペテロの日をわたしのもとで過ごすことをわたしに約束するならば、わたしは神がすみやかに彼ら〔敵ども〕をあなたに引き渡すであろうと信じる。〕〔果して〕そのようになった。

〔侯の〕友人のさる富豪かつ顧問官が、おのれの教母¹⁾すなわちきょうだいの妻²⁾と結婚した。そこで彼（メトディオス）は大いに〔彼を〕叱責し、教えさとし、なぐさめた³⁾が、〔ついに〕彼を⁴⁾別れさせることができなかった。なぜなら、神のしもべと張り合う他の者たちが、〔彼らふたりの〕財産のゆえに媚びへつらいつつ、ひそかに彼らふたりを墮落させ、ついに彼らふたりを教会から離脱させてしまったからである。そこで彼（メトディオス）は〔こう〕言った。「おべっか使いどもがあなたを助けられない時がやって来るであろう。〔そのとき〕あなたがたふたりはわたしのことばを思い出すことになるだろう、しかし〔もはや〕ほどこすすべはないであろう。」突然、神〔から〕の離反のゆえに⁵⁾、彼らふたりの上にわざわいが下った。すると彼らふたりの跡形も見えなくなり⁶⁾、つむじ風がほこりを巻き上げるように、〔彼らふたりを〕吹き散らしてしまっ⁷⁾た。さらに、彼がたとえをもって明らかに示したところの、これらに似た多くの〔例〕がある。

XII.—さて、これらすべてのことに我慢がならず、人の種族の羨望者であるかの宿敵〔すなわち悪魔〕は、モーセにさからったダタンとアビラムのように⁸⁾、ある者たちを——ある者をばあからさまに、他の者をばひそかに——彼（メトディオス）に向けてけしかけた。彼らはヒュイオパトリア (huiopatria) の異端⁹⁾に災いされて、より弱い人びとを正しい道からおのれの方にそらせつつ、〔こう〕言ったのである。「教皇が権限を与えたのはわれわれである。しかるに彼はこの者とその〔宣〕教とを追放するよう命じている。」

- 1) 底本 《kapetroja svojeja》. このばあいの 《kapetra》は《かつて教母として教父たる自分とともに洗礼式に立ち合い、のちに寡婦となった女》を指すものであろう。教父と教母の結婚は東方教会の禁ずるところであった。
- 2) 底本 《rekše jetrvnja》. 《jetrvnja》は《きょうだいの妻》の意味で、《教母》とはあきらかに異なる。《すなわちきょうだいの妻》は《kapetra》の意味を解しなかった後代の写し手による挿入であろう。Skazanija, 162 参照。
- 3) 底本 《utěsavъ》. Vaillant, 45によればこのばあいの《utěšati》は元来は《はげます》意味だったギリシア語《parakalein》の《mauvaise traduction》であるという。
- 4) 底本 《jego》.
- 5) 底本 《po božju ostapljenju》. 諸書みな《[...] 離反ののちに》と読みかえている。
- 6) 詩篇, xxxvii, 36.
- 7) イザヤ, xli, 16, または詩篇, ciii, 16; i, 4.
- 8) 底本 《jako Dathana na Avirona i Movseja [sic]》を《[...] Dathana i Avirona na Mosěja》に改める。Lehr-Splawiński の底本訳 (p. 243) も拙訳と同じである。民数記, xvi, 12 f. 参照。
- 9) 東方教会の認めなかった、《聖霊》が《父 (patēr) と子 (huios) から出る》(ex patre filioque procedit) という神学説。

さて、彼らはモラヴィアの人びとをすべて集めると、彼らが彼（メトディオス）の追放〔宣言〕を聞くよう、彼らの前で〔教皇の〕教書を朗読することを命じた。だが人びとは、風が木の葉を〔そよがせる〕ように、欺瞞が〔その心を〕ゆさぶった弱い者たちは別として、すべての者が、人の〔世の〕ならいどおり、このような牧者にして教師〔たる者〕を奪われることをりふかく悲しみそして嘆いた。ところが彼らは、教皇の書簡を朗読すると、〔次のような〕くだりを見いだした。「われらのきょうだいメトディオスは、聖にしてまことの教えを奉ずる者であり、使徒の業を果している。そしてその両手の中には、神によりかつまた使徒の座によって、スラヴ人のすべての国ぐにがある。その彼を破門する〔者〕は破門され、その彼を聖とする〔者〕は聖とされるように。」そこで彼らは恥じ入り、恥とともにかすみのように散り去った²⁾。

XIII.—さて、彼らの悪意はこれだけにとどまらず、彼らは〔彼に対抗して〕語り、〔こう〕言った。「〔東ローマ〕皇帝³⁾は彼に対して立腹している。だから、もし彼（皇帝）が彼を見つけたならば、彼は生きているわけには行かない。」だがこのことについても、慈愛に富まれる神は、おのれのしもべをとがめようとはなさらず、〔かえって〕——皇帝の心はつねに神の手中にあるのだ⁴⁾から——皇帝の心の中に〔ある考えを〕吹き込まれ、〔その結果〕彼は彼（メトディオス）のもとに〔次のような〕書簡を送った。「尊敬すべき父よ。わたしはあなたに会うことを熱望する。よって願わくは、あなたがこの世にあるうちに、われらがあなたに会い、かつはあなたの祈りを受け入れるため、われらのもとまで〔来る〕労をいとわないでもらいたい。」

そこで彼はただちにかの地に赴くと、皇帝はおおいなる名誉と喜びとをもって彼を迎え入れた。そして彼の〔宣〕教を称賛し、彼の弟子のなかから〔ひとりの〕司祭と、〔ひとりの〕補祭を、〔その〕聖典とともに〔その地に〕ひきとめた。また彼は、彼（メトディオス）が望んだかぎりのあらゆる希望をかなえてやり、何ごとについてもこぼむことなく、彼を愛するようになり、十二分に〔贈物を〕贈ったのち、彼をふたたびおごそかにその〔大司教〕座まで送らせた。総主教⁵⁾も同様であった。

XIV.—さて、この〔旅行の〕全途次を通じて、彼（メトディオス）は悪魔によって数かずの危険におちいった。荒野では盗賊に〔出合い〕、そして海では嵐による〔大〕波に〔出合い〕⁶⁾、川では予期せぬ砂州に〔出会った〕⁷⁾。〔それは〕あたかも使徒の〔次のような〕ことばが、彼の〔身の〕上に実現したかのようであった。「盗賊の難、海上の難、川の難、にせきょうだいの難〔に会い〕、労苦と苦難に、たびたびの徹宵に、たびたびの飢

1) 底本《[...] žaljaacha si. lišajemi [...]》.《.》を《,》に改める。

2) 知恵の書, ii, 4.

3) Basileios I (867-886) を指す。

4) 箴言, xxi, 1.

5) 総主教 Phōtios を指す。

6) 底本《po morju vь vlyny vētrny》.

7) 底本《vь sirti nezaarьny》. Lavrov をはじめ諸書みな《vь sьmьrti》に作るが、Miklosich はこれを《vь surьti [＜ギリシア語＞ surtis]》の誤記と推定、底本もそれに従っている。Fontes,

えとかわきに¹⁾、また使徒が思い起こすほかの〔多くの〕苦しみに〔身をさらした〕。²⁾

XV.—さてこののち、彼はすべての喧騒をうち棄て、おのれの憂いを神にゆだねたうえ³⁾、あらかじめおのれの弟子たちのうちからひじょうにすぐれた速記者たるふたりの司祭を任命し、3月から始めて10月の26日まで、6か月の間に⁴⁾、すみやかにマカベア書をのぞく〔旧約〕聖書全部を、ギリシア語からスラヴ語にあます所なく翻訳した。〔この仕事を〕終えると、彼はこのような恩寵と成功とを与え給うた神に、しかるべき称賛と栄光とを捧げた。そして彼はおのれの聖職者たちとともに聖なる犠牲の秘儀⁵⁾をとり行ない、聖デメトリオス (Dēmētrios)⁶⁾の記念日を祝ったのである。なぜなら、はじめに彼が哲人とともに訳しておえていたのは詩篇と福音書、およびアポストルと教会典礼〔書〕抜粋だけだったからである。彼はまたこのときノモカノンすなわち〔教会関係〕法典と教父たちの著作⁷⁾をも翻訳した。

XVI.—さて、ドナウ川〔流域〕の地方にハンガリアの王がやって来たとき⁸⁾、彼(王)は彼に会いたいと思った。するとある人びとが、彼は〔何ら〕苦しめられずに彼(王)のもとから逃れることはできないと言い、かつ懸念したが、〔それでも〕彼は彼(王)のもとに出かけて行った。だが彼(王)は、君主〔たる者〕にふさわしく、栄誉をもっておごそかに、かつよろこんで彼を迎えた。そして彼は、かようなふたりの人士がことばをかわすのにふさわしい仕方⁹⁾で彼(メトディオス)と談じたのち、彼を抱擁し、接吻すると、〔次のように〕語って、おびたしい贈り物とともに彼を送りだした。「尊敬すべき父よ、あなたの聖なる祈りのなかで、つねにわたしを思いおこされよ。」

XVII.—同じようにして彼はあらゆる方面における糾弾をすべて排除し、饒舌な人びとの口をつぐませた⁹⁾。彼は義の冠を待ちのぞみつつ、走るべき行程を完走し、信仰を守りとおした⁹⁾。そして、かくも神のみ心になんて彼が〔神に〕愛(め)でられし者となっ

163, 234 を参照。ちなみに Dvorník, 391 は《des fonds sableux》, Kliment 3, 202 は《пясъници плитчини》と訳している。なお Lehr-Splawiński の底本訳(244)が《wiry》となっていてテキストと異なるのは不可解である。

1) コリント II, xi, 26-27.

2) 詩篇, 1v, 22-23; ペテロ I, v, 7.

3) 3月から10月26日まではいうまでもなく6か月ではなく8か月である。この6という数字は、がらんば glagolica で書かれていた写本を kirillica に写しかえるさい、8をあらわす文字(いわゆる《dzelo》)が glagolica では8を、kirillica では6を意味するところから、写し手が誤って8を6としたものと考えられる。Vaillant, 46; Skazanija, 168 を参照。

4) 底本《svętoje vřznořenje tainoje》.

5) メトディオスの生まれ故郷テッサロニケの守護聖人。その記念の日はメトディオスの翻訳事業完了の日と同じ10月26日。

6) これらがいかなる文献を指すかについては Skazanija, 169 f.; Bujnoch, 186 f. を参照。

7) 底本《priřďďřu […] kralju Agrřskujemu [sic]》. ハンガリアの「王」が何を意味するかについては、Skazanija, 170 f. を参照。

8) 詩篇, 1xiii, 11.

9) テモテ II, iv, 7-8.

たとき¹⁾、試練からの休息²⁾と、数多くの労苦〔へ〕のむくいを受け取る時が近づきはじめた³⁾。

さて、〔人びとは〕彼にたずねて〔こう〕言った。「尊敬すべき師父よ、あなたはおのれの弟子たちのなかで、あなたにとって誰が、あなたの〔宣〕教の後継者であればよいと思われるか。」すると彼は、ゴラズド (Gorazdъ) という名の、おのれの信頼するにたる弟子たちのひとりや彼らに指し示して、〔こう〕言った。「この者はあなたがたの地の自由人であり、〔かつ〕よくラテンの聖典にも通じ、〔かつまた〕まことの信仰を持つ者である。これが神の意志〔であり〕、あなたがたの望み〔であり〕、わたしの〔それ〕でもあれ。」

さて、枝の主日に彼ら〔すなわち信徒たる〕すべての人びとが参集したとき、彼は教会に入り、そして健康はすぐれなかったが、〔東ローマ〕皇帝と侯 (スヴァトブルク) と聖職者たちとすべての人びとを祝福することを命じ⁴⁾、そして〔こう〕言った。「子どもたちよ、〔きょうから〕3日目までわたしを見守っててもらいたい。」そして、そのようになった。3日目が明けかかったとき、彼はさらに〔こう〕言った。「主よ、あなたのみ手にわたくしの魂をゆだねます。」⁵⁾そして、天地開闢より6393年⁶⁾、第3インディクティオ⁷⁾の、4月6日に、彼は司祭たちの腕のなかで永眠した。

さて、彼の弟子たちは彼を〔埋葬する〕準備をととのえ、〔彼に対して〕ふさわしい榮譽をささげてから、ラテン語とギリシア語とスラヴ語によりミサをとり行ない、彼を司教座聖堂に葬った⁸⁾。そして彼は、おのれの父祖たち⁹⁾、総主教たち、また預言者たち、使徒たち、教父たち、殉教者たち〔の列〕に加えられたのである。だが、人びとは無数の群衆となってあつまり、〔この〕良き師にして牧者〔たる人〕のために泣きながら、ろうそくを持って〔彼を〕見送った。男も女も、子どももおとなも、富める者も貧しき者も、自由人も奴隷も、やもめもみなしごも、異国の人も同国の人も、病める者もすこやかな者も、あらゆる人びとが、すべての人を得るためにすべての人に対しすべての人のようになった彼のために¹⁰⁾〔泣いたのである〕。

だが、聖にして尊崇すべきかしらよ、あなたは高みよりあなたの祈りによって、あなたを慕うわれらを見守り給え。〔宣〕教を広げ、異端を追放しつつ、みずからの弟子たちをすべての試練より救い給え。あなたの羊のむれであるわれらが、われらの¹¹⁾召しにふさわ

1) 底本 «i ponježe […] vŕzljubljenъ bystъ». 知恵の書, iv, 10 を参照。

2) 知恵の書, iv, 7.

3) 黙示録, xiv, 13.

4) 底本 «kazavъ blagodatī [sic]» を Lavrov に従って «kazavъ blagodatī» に改める。古来問題となっているこの箇所種々な読み方については Slovník jazyka staroslověnského, Praha 1966, s. v. blagodatī を参照。なお Fontes, 237 は当時のギリシア語およびラテン語による典礼において benedicere と gratias agere はほぼ同義語であったとしつつも、この文脈では blagodatī は不適当としている。

5) ルカ, xxiii, 46; 詩篇, xxxi, 5.

6) すなわち西暦 885 年。

7) Vita Const., c. XVIII (『スラヴ研究』No. 32, p. 213, 注 12) を参照。

8) 所在については例えば Skazanija, 172 を参照。

9) 行伝, xiii, 36.

10) コリント I, ix, 19, 22.

11) 底本 «dostoino zъvanъja vašego». エペソ, iv, 1 によって «вашego» を «našego» と改める。

木村彰一・岩井憲幸

しくこの世で生きたのち、われらの神キリストの右のかたわらにあなたとともに立ち、彼から永遠の生命を得るために。なぜなら、その〔神〕に栄光とほまれとが、とこしなえにあるからである。アーメン。